

主 題：かしらはキリスト

聖書箇所：随所

今日は父の日ということで、私たちの群れの中にもそれぞれの家庭にあって霊的リーダーとして働いてくださっている皆さん、心から感謝し、また、神が皆さんを益々強めて用いてくださることを祈ります。今日、皆さんとごいっしょに見たいのは、先ず、コリント人への手紙第一11章です。

もし、だれかが皆さんに「クリスチャンとはどんな人たちですか？」と聞かれたとしたら、皆さんはどう答えますか？少なくとも、このような定義ができると思います。「クリスチャンとは、主イエスを愛し、主イエスに従う者たちである。」と。私たちはイエスに従う者として生まれ変わりました。ですから、使徒ヨハネが言うように「キリストが歩まれたように歩まなければなりません。」（Ⅰヨハネ2：6「神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。」）と、当然のことです。パウロは確かにそのように生きていた人物です。

このⅠコリント11：1を見ると「私がキリストを見ならっているように、…」と記しています。彼は主イエス・キリストを模範として、イエス・キリストが歩まれたように生きようとした、また、そのように生きていた人、そのような信仰者であるとの箇所が私たちに教えてくれます。その後には「…あなたがたも私を見ならってください。」と、パウロはこのように教えています。こうして日本語を見ると「私を見ならってください。」と、あたかもパウロがお願いしているかのように取れます。でも、この「ください」という動詞は命令形でしかも現在形です。パウロはイエス・キリストを模範として生きていた。そして、彼はこのコリント教会の兄弟姉妹たちに対して、「私を見ならって、私を模範として歩み続けなさい」とこのように命じているのです。

なぜ、パウロはこのような命令をしたのでしょうか。「主イエス・キリストを模範として歩いていきましょう」とそのように言えばよかったのに、なぜ、彼は「私を見ならう者になりなさい」と言ったのでしょうか？明らかなことは、パウロはクリスチャンに与えられた責任をよく知っていたからです。クリスチャンであるあなたに神はどのような責任を与えておられるのか？そのことを彼は知っていました。クリスチャンは周りの人たちに、そして、あなたの後について来る多くの者たちに対して模範を示すという責任を持っているのです。我々クリスチャンは人々に模範を示すという責任を神からいただいた者たちです。

ですから、皆さん思い出しませんか？イエスは「あなたがたは地の塩です。」と言われました。塩気を付けるという働きです。人々に渴きを覚えさせるのです。人々が腐食していくことを防ぐのです。「世界の光です。」とも言われました。家にいる人々全部を照らすためです。「私が信じたからこの信仰は私だけのものであって私が保っていればいい」ではないということです。救いに与った私たちはその信仰者としての生きざまを通して周りの人たちに、救いのすばらしさ、また、神のすばらしさを明らかにしていくのです。今話したことはマタイの福音書5章13－16節にこのように書かれています。「13 あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。14 あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。15 また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」、お気づきになったでしょうか？私たちは責任をもっているのです。周りに人たちに対して、どのように生きていくのかを証する責任をもっているのです。クリスチャンであるあなたは、あなたの親族に対して友人に対して、あなたの近所の人たちに対して、そして、兄弟姉妹たちに対して、イエス・キリストを愛する者はこのように生きるのだと、そのことを明らかにする責任を負っているということです。

そして、周りの人たちの中で私たちが最も重要視しなければならない人間関係は家族です。神はある人に結婚を許し、そして、結婚した人たちの中に子どもを託されます。もちろん、そうでない人たちもいます。どちらが優れているということではありません。神がそのように決められてそのように為されるのです。神から子どもを授かった者たちには、その子どもたちは私たちの私物ではありません。所有者は神です。神が私たちに託してくださったのです。ですから、託された親は、神がどのような目的で子どもを自分たちに託されたのか、そのことをしっかりと覚えなければなりません。その責任を自覚しなければいけないのです。

この世の専門家たちは「親にはどのように生きるのかを子どもに教える責任がある。」と言います。もちろん、それはある面で事実です。しかし、子どもを託してくださった神が言われることは「唯一真の

神を愛するように彼らを教えていきなさい」です。子どもを託された親として、どのような責任を私たちは神からいただいたのか？自分たちだけでなく、子どもたちが唯一真の神を愛するように、そのように教え導いていくようにと神は命じておられるのです。それが私たちの責任です。彼らが神を第一に、何ものよりも神を心から愛する者となる、それが私たちがしっかり覚えなければならない責任です。

というのは、私たちはみな、何かを残してこの世を去っていきます。いろいろな遺産を残します。でも、私たちの愛する家族に残したい遺産はまさに信仰の遺産です。それが永遠に価値あるものだからです。どのようなものを私たちが残したとしても、物質であるなら、それは持っていけないいつまでも続くものではありません。私たちクリスチャンが知っていることは、死んですべてが終わるのではなくその後永遠があるということです。私たちが残さなければならない遺産は、自分たちだけでなく後に続く愛する家族のひとり一人もこの祝福に与ることです。神を愛して、罪の赦しをいただいて、永遠のいのちをいただいて彼らが生きる者と変えられることを、私たちは最高の目標に掲げて、そのように彼らを導いていくことが必要です。

かつて、この講壇からもメッセージをいただいたスティーブ・ローソン師は「レガシー」、日本語では「遺産」という本を書かれて、その中でこのように記しておられます。「信仰による遺産だけが真に残すに値する遺産なのです。」と。そのことはもう私たちはよく分かっています。私たちが残したいのはこの「信仰」です。そして、次の世代がその信仰をしっかり自分のものとして、そのまた次の世代にその信仰を渡していくのです。

ローソン先生の本の中に、ニューヨーク州にいる社会学者のチームによって、一人の父親がその子ども、その後の世代の人たちにどのような影響を与えたかを調査する試みがなされたと、そして、その結果が記されています。この調査チームが対象として選んだのは18世紀の同じ時代に生きた二人の男性です。というのは、何年か経たなければどんな影響を及ぼしたかが分からないからです。だから、4世代に亘って、そこから生まれて来た子孫たちがどんな影響を受けたのか？そのことをこのチームは調査したというのです。二人の男性のうちの一人はマックス・ジュークスという人物です。もう一人はジョナサン・エドワードです。

マックス・ジュークスは全く信仰を持たない人で、人生における主義主張のない人、また、彼の妻も信仰を持つことなく人生を終えたと記されています。この人がどのような影響を彼の家族に与えたのか？4世代経って、彼の子孫は分かっているだけで1200人、彼らはどんな人生を送ったのか、一部しか紹介できませんが、一番多い数、440人は放蕩の限りを尽くす人生だったと言います。その後のリストは大変です。ホームレスになったり売春婦になったりアルコール中毒患者になったり、ある人は殺人者であったと。少なくとも、この1200人の子孫を見ると、神を愛する者は出て来ていません。悲しい結果です。

もう一人のジョナサン・エドワード、彼はどのような人物であったか？大変有名な牧師でした。しかも、優秀な神学者でした。彼が活躍した時代はアメリカがまだイギリスの植民地であったときです。そのときに伝道し、信仰の成長のために尽くした人物です。後に彼はアメリカのプリンストン大学の学長にもなっています。彼は信仰をもつ家庭に生まれ、すばらしい信仰の持ち主であるサラと結婚をします。二人は力を合わせてすばらしい遺産を後の子孫たちに残したのです。彼らの子孫300人は牧師になり宣教師になり神学教授になったと。それ以外にも大学教授や弁護士や医師や裁判官、14の大学の学長、一人はアメリカの副大統領であったと記しています。

この統計が言いたいのは、どんなに世の中で成功したかではありません。どんな影響をその子孫に及ぼしたかです。神を全く信じていない一人の人物は悲しいけれど大変な遺産を残しました。そして、それを受けてその子どもたちも、またその子どもたちも神に背を向ける人生を歩み続けました。ジョナサン・エドワードはクリスチャンとして、神を愛する者として、神の大切な真理を教え、そして、その真理に従って生きていました。もちろん、すべては神のあわれみです。でも、こうして神を愛する者たちを神はたくさん起こしてくださったのです。

つまり、この統計が私たちに何を教えてくれるのか？「親には大変大きな責任がある」ということです。繰り返しになりますが、信仰こそ子どもたちに残せる最も大切な遺産です。そして、これこそ、神が親に求めておられることです。そして、このために神は子どもたちを私たち親に託してくれたのです。

でも、模範を示すことは大変難しいではないですか？と、そのように言う方もたくさんおられると思います。しかし皆さん、良き模範を示すことというのは、私たちにとても大変なことでも重荷でもないのです。私たちがすぐに勘違いしてしまうのは、神は私たちにすべてにおいて完璧でなければならないと言っておられると思うことです。でも、そういうことを命じられているではありません。もちろん、父なる神が完全であるように私たちも完全であることを命じられているから、それを願いながら生きるのですが、毎日の生活はどうですか？神を喜ばせることよりも神を悲しませることが多いのが現実です。

神が私たちに望んでおられることは「神が喜ばれることを行い続ける人でありなさい」です。だから、私たちは罪を犯したときにはその罪を告白しながら生きるのです。それが神が喜ばれることだからです。そして、私たちはまたみことばに従っていこうとします。失敗したらまた赦していただいて従っていきます。

なぜ、このような生き方をするのか？この生き方こそ主なる神からいただいた信仰が生み出すものだからです。主なる神からいただいた信仰は「神が喜ばれる行い」を生み出すものです。皆さん、私たちが何回も学んでいるように、救いというのはただ天国に入る切符をもらうだけではありません。救いは神が私たちを新しく造り変えてくださることです。神に逆らい続けて来た者が、神を愛して神に従う者へと造り変えられるのです。だから、失敗しながらでも神を愛するゆえに、神が喜ばれることを行っていきたくと、その願いをもって私たちは歩み続けて行こうとするのです。

パウロが言ったように「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」(エペソ2:10)、こういう人へと私たちは生まれ変わったということです。ヤコブもこのように言っています。ヤコブの手紙2:20-21「:20 ああ愚かな人よ。あなたは行いのない信仰がむなしいことを知りたいたと思いますか。:21 私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行いによって義と認められたではありませんか。」。だから、イエスが言われたように「実によってその信仰が本物かどうかを見分けることができる」のです。マタイ7:16-20「:16 あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。:17 同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。:18 良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。:19 良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。:20 こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。」。だから、救われているなら失敗しながらも神に喜んでいただきたい、神を喜ばせていきたくと、そういう願いを私たちはもっています。だから、そのように生きていくのです。ですから、パウロはそのように生きていたのです。そして、我々信仰者にも、もちろん、字義的にはコリント教会の人たちに、そのように歩みなさい、なぜなら、あなたがたはそのような歩みをするものとして生まれ変わったからと言うのです。

この群れの中にもそのような願いをもって一生懸命託された子どもたちを導いて来られた皆さん、私たちは間違いなくその子どもたちがこの救いに与ることを願っています。自分のいのちを犠牲にしても、自分が地獄に行っても、子どもたちが救いに与ってほしいと親であるならそのように望みます。でも、どんなにそのことを強く願っても私たちは人を救うことはできません。私たちにできることは、主の模範に従って生きることによって、クリスチャンとはどんなにすばらしいのか、そのことを示すことです。だから、今、望んでいる結果がなかったとしても、皆さんにできることは、そのように歩み続けて行くことです。神が喜んでおられるなら必ず神はあなたを通して働きを継続してくださいます。祈りながら「主よ、どうぞ私を使ってください。」と自らをゆだねて神のみことばに従い続けていくのです。ですから、どうぞ、今歩んでおられるように、主に従順に従い続けてください。

さて、もう一度、今日のテキストIコリント11章を見てください。パウロは従順の大切さを11:3で教えています。「しかし、あなたがたに次のことを知っていただきたいのです。すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。」と。ここにパウロは従順の大切さを三つの関係を引き合いに出して教えています。(1) 男とキリストの関係(2) 女と男の関係(3) キリストと神との関係の三つです。

(1) 男とキリストの関係 : 「すべての男のかしらはキリストであり、」確かに、ここに「男」と訳されていますが、このことばは「男、夫」という意味をもっています。また、このことばには「人」という意味もあります。どちらかと言うと、ここは文脈から見て「男」というよりも「人」と解釈した方がいいでしょう。なぜなら、「男のかしらはキリストだ」と言いました。「かしら」というのは指示や命令を下す権力をもった存在です。「かしら」である方が「このように生きなさい」という命令を下されるのです。それを聞いた者たちはそれに従って生きていきます。「キリストに従う」ということは男性だけでなく男女とも責任です。ですから、男性に限定せず、人、「すべての人」と解釈するべきです。すべての人に「あなたのかしらはキリストです。このキリストこそあなたの主人ですからこの方に従いなさい」と言われ、そこに従順が要求されます。

(2) 女と男の関係 : 次の関係は「女のかしらは男であり、」です。男女の関係です。これはどちらが偉いということではありません。Iテモテの2章を学んだときを思い出してください。男性と女性には違った責任が与えられているということを見ました。男性にはリーダーとしての責任が与えられたのです。女性はそのリーダーを支えるという責任が与えられました。だから、「女のかしらは男であり、」とは神の計画では女性は男性を支えるものとして、その導きに従っていきなさいと教えているのです。

(3) キリストと神との関係 : ご存じのように、人となられたイエス・キリストは父なる神に完璧に従われました。すべての点でイエスは完全に従順を貫き通しました。

ですから、この箇所が私たちに教えていることは、だれであったとしても「神に従う」ということ、それが大切だということです。だから、3節で見たように、「あなたがたのかしらはキリストだから従いなさい。男女の関係においてもこのように神が教えてくださっているから、このような務めが与えられたからそれに従っていきなさい。なぜなら、主イエス・キリストもこの世に人としてお見えになったときに、私たちにすばらしい模範を示してくださったのは、父なる神に完璧に従っていかれたこと、その従順こそ彼の歩みの特徴であった。」と、このように言えるのです。

ですから、パウロはこうして私たちに従順に生きていくことの大切さを教えるのです。主に従順に従うことによってその生きざまを周りの人たちに示していきなさいと。人生とはこのように生きるのだ。このように生きることが幸せを得る方法なのだということを、ことばだけでなく模範をもって示していきなさいと、そのように教えるのです。

先ほどから見てるように、すべての人がこのように生きる必要があります。私たちクリスチャンはこのように生きるのですが、特に、父親、男性には大きな責任があります。なぜなら、男性は家庭的リーダーだからです。だから、しっかりと主に倣って歩み続けることです。私たちは今から、私たちが模範とするべき主の歩みについて、できるだけ具体的に見ていきます。イエス・キリストがどのように生きたのか？それを学ぶことによって、願わくは、私たちの生き方がキリストに似たものに益々変えられて行くように…。

◎模範とするべき主の歩み

イエスの歩みの特徴は「二つの命令の実践である」とこのように言うことができます。まさに、それは神が人間に与えた命令です。「神を愛すること」と「人を愛すること」です。この二つの大切な戒めをイエスは完璧にこなされました。従順に守られました。

A. 人を愛された

1. あわれみ深いお方 : 人の本質的な必要を知っておられた

「人を愛する」ということ、イエスは人を愛されました。私たちを愛してくださった。愛するゆえに私たち罪人にあわれみを示してくださった。イエスが群衆をご覧になったときに「また、群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかawaiiそうに思われた。」(マタイ9:36)と言われました。イエスが見られたのは外側ではなく本質です。どんなに楽しそうに生きていても、どんなに騒いでいても、彼らは今まさに永遠の滅びに向かっていて、そのことをご覧になったのです。彼らは今幸せそうだけれどどこに向かっていてのか？私たちが見なければいけないことをイエスはちゃんと見ておられるのです。彼らに対してあわれみの心をもちあわれみを示されたのです。だから、イエスは取税人や罪人たちといつもいっしょにおられました。パリサイ人がイエスの弟子たちに聞いています。マタイ9:11-13「:11すると、これを見たパリサイ人たちが、イエスの弟子たちに言った。「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人といっしょに食事をするのですか。」、イエスは答えておられます。「:12 イエスはこれを見て言われた。「医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。:13『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」と(並行箇所、マルコ2:17、ルカ5:32)。救いを必要としている者たちのその救いのためにイエスは来られたのです。

皆さん、覚えていますか？イエスが十字架に架かったときに、イエスを嘲笑う者たちに対して、イエスは天からの火をもって彼らを滅ぼすことなど容易いことでした。しかし、イエスが為さったことは、ルカ23:34「そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。」、最後の最後まで罪人に愛を示されました。この祈りというのは、ここにいるすべての人たちが「なぜ、主イエス・キリストが十字架に架かっているのか？」、その意義を知るためです。主は自分のことよりも彼らの必要に応えようとされたのです。それほどイエスはあわれみを示されたお方です。

2. 犠牲を進んで払われたお方 : そして、同時に、自ら進んで犠牲を払われたお方でした。ただ「愛している」とことばで言うだけではありません。喜んで犠牲を払おうとされました。イエスのメッセージの中に「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」(ヨハネ15:13)があります。自分の一番大切な「いのち」をだれかのために犠牲にする、これ以上の愛は存在しないと。実は、そのことを神は私たちのためにしてくださったのですが、では、私たちはその愛を受けるにふさわしかったのか？というと、そうではありませんでした。

パウロがこのように教えています。ローマ5:6-8「:6 私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。:7 正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。

情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。：8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」、罪人であったとき、神に背を向けて逆らい続けた私たちを、神が一方向的に愛して救いを備えてくださり救いを与えてくださったのです。ヨハネもその手紙の中で言っています。Iヨハネ4：9、10「：9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。：10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」

主イエス・キリストのその生きざまを見たときに、私たちが教えられることは、彼は確かに人を愛してくださった。あわれみの心をもって、そして、喜んで犠牲を払って、彼らに最も必要な救いを与えてくださったのです。皆さん、私たちは救いを人々に与えることはできません。でも、救いをどうすれば得ることができるのかを語ることはできます。しかも、その救いをいただいた者として人々に証することができます。「なんば」に行ってみたり、浜寺公園の駅に立ってみたり、電車に乗っているときに、いったい、この中の何人の人が救われているのだらうと思います。間違いなく、99.9%の人は救われていません。私たちはそのことをしっかり覚えて、主の歩みに倣っていくことです。

B. 神を愛された

二つ目に、イエスの歩みを見て教えられることは、彼は確かに神を愛されたお方でした。

1. 聖く正しいお方 : ヨシュア記24：19に「すると、ヨシュアは民に言った。「あなたがたは【主】に仕えることはできないであろう。主は聖なる神であり、ねたむ神である。あなたがたのそむきも、罪も赦さないからである。」とあります。もちろん、イエスは神ですからすべてにおいて完璧に聖いお方です。しかし、同時に、彼は人でもありました。主イエス・キリストが人としてこの地上を歩まれたときに、彼がすべてにおいて聖かったことを私たちは知っています。というのは、神は完全に聖いお方だからです。ペテロがこう言います。Iペテロ1：15、16「：15 あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい。：16 それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならぬ」と書いてあるからです。」、イエスはすべてにおいて、父なる神がそうであるように、完全な聖さをもって歩み続けられたのです。神を愛しているから神が喜ばれることをしたのです。

2. 従順なお方 : そして、神を愛するゆえに、先ほども見たように、すべてにおいて従順でした。そのことをマタイの福音書4章から見ていきましょう。ここには主イエス・キリストが悪魔の試みを受けられたその様子が記されています。

1) 肉体的な必要への誘惑 1-4節 : 2節に「そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。」とあります。イエスは断食のあとで大変な空腹を覚えておられ、肉体的にも疲れて極限にあったのでしょう。このときにサタンは見事に働きかけるのです。

(1) サタンの誘惑 : イエスが空腹であることを知っていたサタンは、その空腹を満たすために「あなたの力を使いなさい」と言ったのです。巧妙です。3節「すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」と。サタンは父なる神の真実さに対して不信を抱くようにと働くのです。私たちは「神は必ず私たちの必要を満たされる」と知っています。皆さんも「神は私の必要を必ず満たす」と信じていますね？それは聖書の教え、神の約束です。もし、それを信じていないなら問題です。サタンがしようとしたことは、その信頼をぐらつかせることです。「あなたは神の子でしょうか？40日40夜断食して空腹を覚えているのに神はいったい何をしているのでしょうか？なぜ、あなたの空腹を満たしてくれないのですか？」と、サタンはこうして父なる神への疑いを抱かせようとするのです。彼が望んだことは、イエスがここで「本当だ、約束してくださったにも拘わらず、私の必要は満たされていない。じゃもういいや、神になど頼らないで自分で何とかしよう。自分の力を使って石をパンに変えよう。そして、私の空腹を満たそう。」とすることです。もし、イエスがそのようなにされたなら、それは罪を犯したことになると思います。みこころに反するわけです。

(2) 主イエスの応答 : イエスがどのようにお答えになったのか？ 4節「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある。」と。これは申命記8：3を引用されました。「それで主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナを食べさせられた。それは、人はパンだけで生きるのではない、人は【主】の口から出るすべてのもので生きる、ということ、あなたにわからせるためであった。」。イエスが答えられたことは、自分の肉体的な必要を満たすことよりも、もちろん、そのことも大切ですが、霊的なことはそれよりももっと大切だということです。つまり、神のみこころに従うことが何よりも、食べ物よりも大切なことだと答えておられるのです。イエスがここで私たちに示してくださった信仰、その生きざまは、肉体的な必要を満たすことよりも神のみこころに従うことを優先されたことです。私たちもいろいろな必要を抱えます。後で見ますが、その機会はあるが神がどんなにすばらしいお方であるかを学ぶレッスンのときです。あなたに必要なのは

神を信頼し切ることです。この方はそれにふさわしいお方です。イエスのこの誘惑に対する勝利は、空腹であり疲れていたけれど、神がすべてのことをみこころに沿って為しておられると、そのことを信じてみこころを待ち望むことです。

2) 自分の願望への誘惑 5-7節 : 5-6節「:5 すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、:6 言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる』と書いてありますから。」

(1) サタンの誘惑 : エルサレムの神殿の一番高い所にイエスを連れて行って、そこから身を投じてみなさいと言います。そこからは東側ですからオリブ山が見えます。そして、ケデロンの谷に向かって身を投じなさいと言うのです。サタンは「あなたは神の子でしょう？たとえ、この神殿の頂から飛び降りたとしても、絶対死なないですよ。だって、あなたは神の子ですから。」と、このように誘惑するのです。興味深いことは、イエスがこのことに対してどのようにお答えになっているか？です。7節「イエスは言われた。『あなたの神である主を試みてはならない』とも書いてある。」つまり、このサタンの誘惑は「神を試みること」でした。そのようにイエスご自身が教えておられます。

「神を試みる」とはどういうことでしょうか。「神のみこころに関係なく、自分の願いを叶えるために神に働いていただくこととすること」です。本来なら、神のみこころを求めそれに従っていきます。でも、この「試みる」というのは、神のみこころではなく自分自身の願いを叶えるために神に何とか働いていただくこととすることです。たとえば、子どもが自分の親の愛を疑って、ほんとに自分のことを愛してくれているのかな？と思ったとき、こんなことを考えませんか？自分を愛してくれているならきっと〇〇のことをしてくれるに違いない、もし、してくれないなら自分のことを愛していないのだと…。まさに、これは「試みる」、テストをしているのです。

実は、こういう出来事がイスラエルの人たちの経験の中にあります。メリバでのことですが、民数記 20 : 7-12 に書かれています。「:7 【主】はモーセに告げて仰せられた。:8 「杖を取れ。あなたとあなたの兄弟アロンは、会衆を集めよ。あなたがたが彼らの目の前で岩に命じれば、岩は水を出す。あなたは、彼らのために岩から水を出し、会衆とその家畜に飲ませよ。」:9 そこでモーセは、主が彼に命じられたとおりに、【主】の前から杖を取った。:10 そしてモーセとアロンは岩の前に集会を召集して、彼らに言った。「逆らう者たちよ。さあ、聞け。この岩から私たちがあなたがたのために水を出さなければならないのか。」:11 モーセは手を上げ、彼の杖で岩を二度打った。すると、たくさんの水がわき出たので、会衆もその家畜も飲んだ。:12 しかし、【主】はモーセとアロンに言われた。「あなたがたはわたしを信ぜず、わたしをイスラエルの人々の前に聖なる者としなかった。それゆえ、あなたがたは、この集会を、わたしが彼らに与えた地に導き入れることはできない。」、モーセは神が言われた通りに岩に命じればよかった、そうすれば、神の栄光が現わされたのです。でも、イスラエルの民の不信仰を見て憤ったモーセは怒りをもって岩を二度打ちます。そこから水が出ることを期待していたからです。でも、それは神のみこころではなかったのです。申命記 6 : 16 にはこのように記されています。「あなたがたがマサで試みたように、あなたがたの神、【主】を試みてはならない。」と。ご存じのように、だから、モーセは約束の地に入ることができなかったのです。神を試したからです。

だから、私たちもいろいろな願望、願いを持ち、それを果たしてほしいと一生懸命神に願います。「神さま、私のことを愛しておられるならこれをくれるでしょう。なぜ、くれないのですか？私のことを愛していないのですか？」とこうして神を試みるのです。しかし、イエスはこのような態度ではなかったのです。イエスは主のみこころに従ったのです。もちろん、彼がその頂から飛び降りたとしても死ぬはずはありません。しかし、それはみこころでなかったから彼はそれを行おうとしなかったのです。

私たちに必要なこと、私たちは個人的にいろいろな願いをもちます。独身の人なら結婚の願いがあるかもしれません。でも、あなたが覚えることは、神は必ずみこころを為すということです。神はあなたの必要をだれよりもご存じです。少なくとも、私たち信仰者が持つべき信仰の態度は、神の約束を信じて神にすべてをゆだねることです。あなたは神の最善が欲しいのか？それとも人間の最善が欲しいのか？比較になりません。神の栄光を現すには神の最善しか方法はありません。

(2) 主イエスの応答 : 7節「イエスは言われた。『あなたの神である主を試みてはならない』とも書いてある。」、自分の願いを叶えることよりも神のみこころに従っていくことを選択するのです。

* サタンがいかに狡猾であるか

6節を見るとそのことが現れています。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる』と書いてありますから。」とあります。実は、これはサタンも旧約聖書を引用しているのです。詩篇 91 : 11-12 「:11 まことに主は、あなたのために、御使いたちに命じて、すべての道で、あなたを守るようにされる。:12 彼らは、その手で、あなたをささえ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにする。」、一度目の誘惑のとき彼はみことばを引用していません。でも、イエスが引用したので彼はそれを受けて「私もできますよ」と、詩

篇9 1篇を引用して「聖書にはこう書いてあるから…。あなたは神の子だから、神殿の頂から飛び降りても天使が守ってくれると聖書に書いてあるでしょう。だから、そうしなさい。」と言います。でも、よく見ると、サタンは詩篇9 1 : 11-12からある部分を省略しているのです。それは「すべての道で、あなたを守るようにされる。」というみことばです。

つまり、詩篇の著者は「主のみこころに従う者に」この約束を与えられたと記します。あなたが主のみこころに従うなら神はあなたを守ると言われているのです。しかし、サタンは非常に巧みにみことばを曲解して、あたかもそのように神が約束されたかのように教えています。ですから、サタンは偽り者であり、偽りの父なのです。ヨハネ8 : 44に「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」とある通りです。嘘つきの天才、だますことの天才です。アダムとエバが、エバがだまされたように、同じように、私たちにもこうして働き続けています。イエスは『あなたの神である主を試みてはならない』とも書いてある。」と答えられました。イエスは完全に自分を捨てておられたのです。彼が考えていたことは、父なる神のみこころに従うことだけです。

3) 神のご計画への誘惑 8-11節 :

(1) サタンの誘惑 8-9節 : 「:8 今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、:9 言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」恐らく、こうしてすべての栄華を見せられたのでしょうか。サタンはすべてのものをイエスの前に明らかにして「これを全部あなたに差し上げましょう。今、差し上げましょう。」と言います。もちろん、みことばは私たちに後にはイエス・キリストが新天新地を造られてすべてのものを治められることを教えています。イエスは「王の王であり、主の主」であられます。Iテモテ6 : 15「その現れを、神はご自分の良しとする時に示してください。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、」、黙示録17 : 14「この者どもは小羊と戦いますが、小羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、小羊は主の主、王の王だからです。また彼とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者だからです。」。でも、そのためには「十字架」が必要でした。そのためには「復活」が必要でした。そのためには「再臨」が必要でした。

でも、サタンは「そんなものは要らない、もし、あなたが望むなら今すぐにこれらすべてのものをあなたに上げましょう」と言ったのです。何を誘惑しているのか？そんなに長い時間をかけなくても今すぐに与えますということです。皆さん、私たちがみこころに従っていくためには時として忍耐が必要です。「いったいいつまで待つのだろう？」と人間的に思うこともあります。でも、神は過ちを犯されません。すべてのことをご存じであり、すべてのことを最善のときに為されるお方です。サタンがここで言うことは「そんな先まで待たなくても今それを私が上げましょう。十字架を通らなくてもいいのです。その苦しみを経なくても今あなたはこれを得ることができるのですよ。」です。

ご覧ください。その条件が書かれています。「もしひれ伏して私を拝むなら、」と。サタンは神によって造られた被造物です。その被造物が創造主である神にこのように言うのです。もちろん、この箇所が私たちに教えていることは、今、しばらくの間だけ、この世界はサタンの支配下にあるということです。ですから、この世の流行はすべて神を喜ばせるものではありません。その逆です。音楽や映画などあらゆるものは私たちの心を神に向けるものではなくその逆です。確かに、この世界は今このサタンの支配下にあります。だから、サタンは「今あなたに差し上げましょう」と言います。自分の持ち物だからです。

「差し上げる」ということはそれらを「所有」しているからです。IIコリント4 : 4「その場合、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。」、ヨハネ12 : 32「わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます。」、エペソ2 : 2「そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。」

大変大きな恐ろしい罪をサタンはここで口にします。「もしひれ伏して私を拝むなら、」と。サタンはずっとそのことを望んでいました。イザヤ書で教えているように彼が望んでいることは「神になること」です。すべての被造物が自分を拝むことです。イザヤ14 : 13-14「:13 あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。:14 密雲の頂に上り、いと高き方のように上ろう。』」と。そのことを私たちはここでも見ることができるのです。「今、私を拝めば、あなたが後に持つすべてのものを今あなたに差し上げよう。」と。

(2) 主イエスの応答 10節 : 「イエスは言われた。「引き下がり、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ』と書いてある。」と。自分の計画通りに進むことよりも、忍耐をもってみこころのときを待ち続けると言われます。そういうお方だったのです。

ですから、このようにしてイエスを見たときに私たちが教えられることは、ご自分の肉体的な必要を

満たすためにみこころに逆らうようなことは為さなかった。必要は必ず父なる神が満たしてくださると、その信頼をもって従い続けました。そして、自分の願いや願望を満たすためにみこころに逆らうのではなく、自分のことよりもどんなときも神のみこころに従って行こうとされました。そして、自分の計画に沿ってすべてのことを進めようとしたのではなく、忍耐をもって、神のみこころが為されることを彼は望んでいたのです。

皆さん、神に信頼を置くことです。神が最善を為すということ信じることです。そして、その最善の時を忍耐をもって待つことです。マタイ 4 : 1 を見てください。「さて、イエスは、**悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。**」と書かれています。「**悪魔の試みを受けるため、**」と、この目的でイエスは荒野に上って行ったのです。この「試みる」ということばに関してパークレー師はこのような説明をしているので、最後にそれを皆さんにご紹介します。「試みるというのは、金属が役立つためには鍛え抜かれなければならないように、人も神の目的に沿う者として用いられるためには、試練を受けなければならない。ユダヤ人は次のように言っていた。『尊きかな、聖なる神、神は人に栄誉を与える前に、まず、試練を与えてねんごろに調べられる。そして、試練に耐えた者を引き上げて、名誉ある地位を与えられる。』」と。

主イエス・キリストがこのような試みに遭われたのは、実は、神のみこころであったのです。私たちも日々いろいろなことを経験します。いろいろな試練、いろいろな試みを…。でも、それらはすべてあなたを鍛えるためです。あなたが益々神に喜ばれる器として成長していくための機会です。ですから、私たちはどんなときにもこの主に信頼を置いて生きていくのです。この方が神であるから従うのです。この方が私たちの主だから従うのです。そのような歩みをする者たちを主は変えて、主は祝して主は用いられるのです。主イエス・キリストの模範は私たちにそのことを教えてくれています。そして、その模範は私たちにチャレンジをくれます。あなたはそのように生きていきますか？と。もし、そのように歩んでいるならそのように歩み続けることです。もし、そうでなかったなら、今日からそのように歩むことです。私たちは主の模範に倣って生きる者へと生まれ変わったのです。

そして、そのようにあなたが生きるなら、あなたの後に続く者たちは、あなたの生きざまを見て、その模範に倣って生きていきます。そのようでありなさい、それがみこころだと主は教えてくれています。そのように生きていきましょう。

《考えましょう》

1. キリスト者は「模範を示すこと」ができるのでしょうか？
2. キリスト者にとって「模範を示すこと」がどうして大切なのでしょうか？
3. 主イエスに対するサタンの誘惑を説明してください。
4. あなたは今日からどのように生きて行こうと決心されましたか？ 信仰の友と分かち合って実践に励みましょう。